

## 心理臨床家の面接における感情労働およびその影響と職業的成長の検討 —自己一致（純粋性）との関連から—

松 浦 渉

本研究の目的は、心理臨床家における感情労働の特徴とその影響について、特に初学者を対象として、自己一致という概念との関係から検討していくこと（目的①）、否定的感情を抱えることの精神的健康への影響について検討すること（目的②）、また比較検討を行い、感情労働、および自己一致の観点から初学者の心理臨床家の成長、職業的発達に関して考察していく（目的③）ことであった。調査対象は113名で、そのうち臨床心理士資格取得者が53名、資格未取得者が60名であった。また大学院在籍者が58名、在籍していない者が55名であった。

結果について心理臨床家における感情労働の特徴について検討したところ、経験した感情を抑えたり隠したりする行為である「抑制的行為」、自分の感情を装って表出したり、相手との関係の中で表現方法を調節したりする行為である「表出的行為」、相手のことを理解しようと行動する行為である「理解的行為」の3つの要素から構成されていることが明らかとなった。本結果は看護師の感情労働の内容とは異なっている部分も多く、心理臨床家という独自の職業特性を反映した結果であると考えられた。

次に否定的感情の及ぼす影響について検討した結果、多くの種類の否定的感情を感じている者ほどいら立ちや不愉快な気分を経験する「不機嫌・怒り」や何かに集中できなかつたり良くないことを考えてしまう状態の「無気力」的な反応が生じやすいことが示唆された。

次に共分散構造分析を行って感情労働と自己一致の及ぼす影響について検討したところ、「抑制的行為」が「自己一致」に負の影響を与えていることが示され、自身の経験した感情を表出しないことが自己一致の状態から遠ざげ得ることが示唆された。また「自己一致」が「ストレス反応」に負の影響を与える傾向があることも明らかとなった。一方で、心理臨床家の感情労働からストレス反応への影響に関しては、直接的な影響は認められなかった。

続いて臨床心理士資格取得者（53名）と資格未取得者（60名）で感情労働および自己一致の影響について比較検討を行うために多母集団同時分析を行った。しかしその結果、両群において有意な差異は見られなかった。このことから感情労働という概念からみたときに、資格を取得して5年以内というのは心理臨床家の発達過程においては新保（1999）の発達段階における「初学者」としての位置づけを支持するものと考えられた。

最後に今後の課題として、本研究で用いた心理臨床家の感情労働尺度を熟達者まで適用できるように妥当性の検討を検討すること、より臨床実践経験の豊富な熟達者との比較検討をする必要があることが考えられた。